史料紹介

襖の下張りより

会員　小川　宣

はじめに

今から一〇年余り前に、私の母屋の襖を取り替えることになった。一枚襖紙を剥がしてみると、その下に和紙が数枚重ねて張ってあるのが確認されたので、一応全部保存しておくことにした。最近、やや手持ち無沙汰になったので、一枚ずつ剥がしてみることにした。大部分はありふれたものであるが、一〇〇枚に一枚位は、これはというものがあるようである。

その中の幾つかを紹介して、より多くの方々に「襖の下張り」に興味をもっていただき、古いものを粗末にせず、大切に保存することへの参考になれば幸いである。

一、毛利徳太郎の落筆

この落筆は、墨痕鮮やかな馬の画に「毛利徳太郎書」と記されている。徳太郎は、徳山九代藩主元蕃の幼名である。これは正に落筆で、毛利の「毛」や徳太郎の「徳」の字を練習したものや、馬の略図の一端が書かれている。

これが何故私の家の襖の下張りにあったかについては、謎である。しかし、言い伝えによると、小川家一〇代の官蔵（号は亀齢）は、徳山藩に仕え、徳太郎のお相手役をさせられていたようで、よく旅のお供もしていたという。

ちなみに、徳太郎は一八一六（文化一三）年の生ま

徳太郎（九代元蕃）の落筆

れで、官蔵は三つ年上の一八一三年の生まれである。徳太郎は、一九歳の時に就範（たかのり）と改め、以後廣篤（ひろあつ）を経て、一八五六（安政三）年に元蕃（もとみつ）に改めている。

二、三代元次の新庄よりの帰府の断簡

1　元次の帰府

一七一六（享保元）年に、前年の正徳五年の万役山事件によって、徳山藩は改易となり、藩主毛利元次は新庄藩に預かりの身となった。やがて、一七一九（享保四）年に藩士をはじめ多くの領民の尽力によって、見事再興された。

藩主元次は、預かりの身を許されて、その年の九月二六日に新庄を発って、翌一〇月六日に芝高輪の徳山藩下屋敷二本榎の新邸に無事に着いた。

その折りの模様を記した覚書の断簡（きれぎれの文書）が、私の家の襖の下張りの中から出てきた。何かの写しだろうと思われるが、これまで出くわしたこと

がないので、一応記録しておくことにした。

2　新庄から江戸までの行程とその模様

この覚書の断簡は、最初の部分が欠如していて、九月二八日からの行程が記されている。「その日は関で休んで、下方沢に泊まり」と、以後休憩した所と、その間の距離も合わせて克明に記されている。

それによると、

「二十九日は福島御休み、八丁目御泊り、三十日は本宮御休み、須賀川御泊り、十月一日は矢吹御休み、白坂御泊り、二日は越堀御休み、大田原御泊り、三日は氏家御休み、宇都宮御泊り、四日は小山御休み、古河御泊り、五日は御休みなく、粕壁御泊り、六日に千寿（住）御休み、夜に入り江戸御着」

とある。

その間の距離の合計は、一〇八里三一丁となっていて、但し書に「武鑑には百十里二五丁とある。」と記されている。いずれにせよ、一〇八里三一丁はおよそ四二五キロで、一一日間の行程だとすると、一日約四〇キロの速さで進んだことになる。

また、江戸までの道中の模様については、「新庄を発って千寿までは何の支障もなく旅行され、浅草より提灯を灯して夜に入って高輪の屋敷へ到着した。」とある。

3　屋敷到着の模様の概略

御隠居（元次）が到着すると、殿（四代元堯）と家老の福間茂左衛門が小姓などを召し連れて出迎え、料理やその外万端しつらえておくよう命じられた。

殿は、式台で出迎え、板の間より手を取って居間に行かれ着座した。その上で殿が御熨斗を差し出し、家来の内田信濃守・奥様・喜久姫をはじめ御付使者属方は、声をたて感涙にむせんだ。

御隠居が言われるには、

「　我は近年配所に在ったので、再会はままならぬところ、御恵をもってかくのごとくになった。天運からは未だ見放されていなかったとはいえども、

ひとえに賢君（八代将軍吉宗）の御厚恩で、これに勝るものはない。

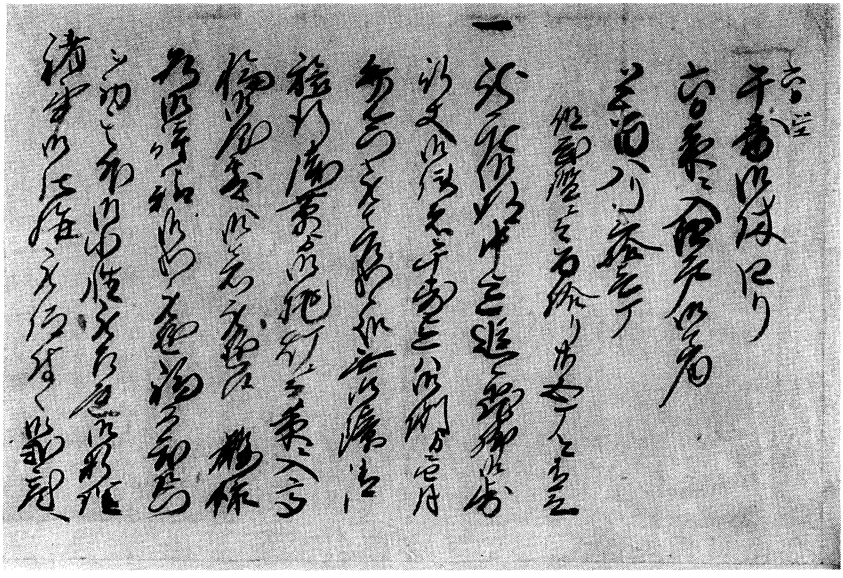
自分は、この御芳恩を心にかけて、一度も忠君に奉じることを忘却してはならないと思う。このことは忠孝の道に叶い、家の長久であって、我が家来の者共へも忘却せぬよう申聞せて置く。このことは、家筋においても永く忘れぬようにすることが第一である。また、我が在世の家来の人柄や目利心を召し抱えたことも第一であった。」

と。

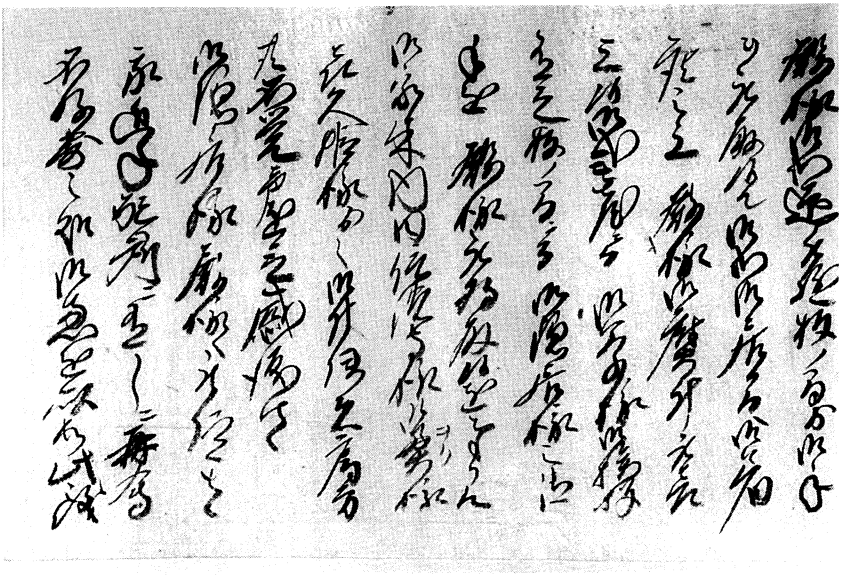
その後は段々に家来が顔を出し、お祝の料理を一緒に食べ、上の者も下の者も、御隠居の慶事を祝した。

【参考】

この僅かな覚書の断簡の中に、三代藩主元次が、どんなに藩のことを憂い、家来を如何に大事にしていたか、また家来が如何に主君を慕い、どんなに尊敬していたかが窺える。このことが、この時代皆無とされていた御家再興の見事なされたことの根源であったと思



元次帰府の断簡（その１）



元次帰府の断簡（その２）

う。

一七一九（享保四）年に、御家再興なり無事に江戸に戻った元次は、この年の一一月一九日に亡くなったが、今年はそれから二八〇年になる。この切りのよい年に、襖の下張りから、御家再興に関わる史料の一端である覚書の断簡が見つかったのも、何かの縁であろうか。

三、切支丹宗門御究の覚えの断簡

「　切支丹宗門御究ニ付　神文ヲ以申上候事

一耶蘇切支丹宗門御制禁附被／仰付候無断絶密々弘法之族有之／通被及聞召弥御穿鑿被仰付候／此組相之内互ニ下人等ニ至迄念ヲ入／相究宗門無紛段銘々名書之頭ニ／旦那寺之印判ヲ突セ奥書取差上申候事

一此組相之内頭之者不及申ニ下々召仕候／者ニ至迄先年以来伴天連宗ニ而御／究ニ付ころび申者壱人茂無御座候／然上者此組相之内於已来伴天

連宗／　　」

四、「防海費献納者ノ叙位」の覚書等

◎褒章

一金一万円以上　金製黄綬褒章

一同　　以下　銀製黄綬褒章

◎位階

一金一万円　有位者ナレバ位二級ヅツヲ進メ

無位者ナレバ五位又ハ六位ニ叙ス

一同五千円　無位者従七位ニ叙セラル

◎名誉学位授与の覚書

一八八七（明治二〇）年に、文部省学務局長浜尾新が、英国のケンブリッジ大学より名誉学位が贈られた。

この名誉学位は、容易に授けられるものではなく、大学が設置されてから一二〇名余りだという。いずれも何かで一世を風靡した者たちで、浜尾新が受領したのは、同氏の光栄であると同時に日本の名誉であると記されている。

浜尾新は、明治時代の教育者で、東京開成学校校長を皮切りに、創立当初から東大とともに歩んだ。明治一八年には文部省からヨーロッパに派遣されているが、この時の活動が認められて名誉学位を贈られたものと思われる。

その後、東大総長を経て文部大臣・元老院議官・貴族院議長・枢密院顧問官・東宮大夫を歴任した。